



KAROでルポは変わるのか？ カーマットの色々を考える

Vol.5 Volkswagen Lupo GTI Cupcar

今回はカーマットの型取り作業をお伝えしたが、先日待望の完成品が編集部へ到着した。悩んだ末に選択したカップカー専用の「クローネ」は、春の新色とも言うべき「ツィードボルドー」に染められている。今月はカロ×ルポのマッチングに満足しつつ、カーマットの新たな真実に気づく。

REPORT / 川崎憲一郎 (本誌)
取材協力&問い合わせ先 /
コックス ☎0465・81・3034 www.cox.co.jp
カロ ☎03・3372・6340 www.karo1980.jp

デカデカと「KARO」と記された段ボールが編集部へ届いたのは、忙しさをピークに達する締め切り前。やることは山ほどあるが、どうもその存在が気になってしょうがない。結局ボクは、値段で言うところのセカンドライン「クローネ」、しかも最近ラインナップに加わった「ツィードボルドー」というカラーをチョイスしたのだが、そもそもカロマットの製品を見るに、「商品ランク」という感覚はなく、ボク自身は適度に洗いのカラーの「クローネ」が気に入っている。そんな訳で、どうにも辛抱ならず段ボールを開封。嚴重にも衣装袋のようなものに入ったマットを取り出した。

トが4枚、ラゲッジルーム用マットが1枚の計5枚。ちなみにラゲッジルーム用マットは、例のオーダーシステムを利用して、オリジナルで作ってもらったものだ。早速床に並べてマット単体を眺めてみると、なんだかどれも複雑な形をしていて正直「こんな形してたっけ？」と不安になる。が、例の「ロールケージの逃げ」を確認してニンマリとする。

そして帰宅の路に付いたのが翌日の早朝。ようやくインプレッションの機会を得た訳だ。

まずはカロマットとインテリアのマッチングから見えてみる。予想通り適度に洗ったツィードボルドーは、簡素なルポのインテリアにも自然に馴染む。ク

ローネのキーポイントとなる天然ウールのふわふわ感も心地良く、この時点ですでにルポの「車格」がワンランクアップした感がある。

細部に目を移すと、今度は各部の精巧なフィッティングに目を剥くこととなった。実のところ今回制作したマットには好みの問題でマットストップバーを付けていないが、もうどこを見てもピッタリフィットなのでマットが動かない。とくにルポ・カップカーに関してはロールケージがあるため、バズルのようにハマル感覚が安心なのだ。

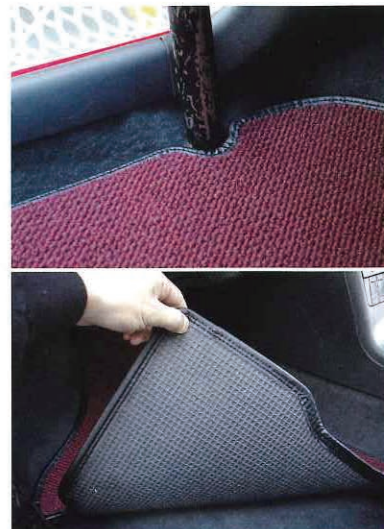
それは実際に走り出しても変わることはなかった。マニュアル・トランスミッションのおかげで忙しくカカトの位置が変わっても、自分専用でセットされたラバーマットがそれを受け止め、依然としてマットは安定している。もとい、貼り付いていると言っているくらいである。一枚2000円の汎用マットでこの感覚は味わえない。

さて、走り出して気付いた点はそれだけじゃない。明らかに足元から伝わってくる振動や反響音が減少しているのだ。カロマットの構造は、いわゆるファブリック部と底面のラバー部分が分離している汎用品と違い、厚みのある一体構造としている。それがマット内での空洞反響をなくし、優れた防音性を実現するらしいのである。音と振動に比例してドライバーの疲労が増すことを考えると、思いがけず「カロマットIIアクティブセーフティ」の公式が見えてくるのだ。

カロマットの耐久性など、使い込むごとに分かる長さは今後もレポートしていくとして、この新たな発見は実際にカロマットを手にするまで分からなかった。カーマットのない状態から一気に老舗カーマットを取付けるといった経験は、意外なところでは有効だったのである。ボクのなかではこれを「体感系アイテム」に分類するでしょう。



如何にもドイツ車なインテリアにも自然なカラーを与えてくれる新色「ツィードボルドー」。ルポは3ドアだが、リヤシートも抜きなくドレスアップされている



オーダーシステムの魅力は、ちょっとした「逃げ」でも正確に再現してくれること。マット裏にスパイク加工は施されないが、バズルのように固定される



今回オリジナルで作ってもらったラゲッジルーム用マット。ステーションワゴンなどに使用すれば、きっと荷室の反響音が抑えられると踏んでいるのだが…、気になるどころだ

